

2026年1月 校長メッセージ「ガザのお父さんからの日本の中高生へのメッセージ」  
(今回の校長メッセージは2学期終業式校長講話原稿を書き直したものです。)

今日は「ガザのお父さんからの日本の中高生へのメッセージ」の話をします。

「ガザのお父さん」とは、ガザ地区で人道支援の活動をしているJICAの職員で、サヘルさんという方です。4年前の2021年に、前任校の英語の先生がJICAの協力をもらって、サヘルさんの双子の高校生の子供たちと交流をしたことがありました。教室とガザのサヘルさんの家とをオンラインでつないで、日本の高校生とガザの高校生とがディスプレイ越しに話をするスタイルで交流を行いました。

皆さんもご存じのことと思いますが、ガザ地区は中東のパレスチナと呼ばれる場所にあります。ヨルダン川西岸地区とともにパレスチナ人が暮らしている地域で、常に紛争に巻き込まれてきた場所です。ガザ地区に住んでいる多くの人々は、イスラエルの建国とともに、住んでいた土地を追われた人々や、中東における戦争から避難してきた人々です。イスラエル建国の経緯については、高校の世界史で必ず学習しますので、日本に暮らす若い世代の人々はぜひきちんと知識として身に付けてください。イスラエルとアラブ諸国とは中東戦争と呼ばれる戦争を繰り返しながら現在に至っています。

ガザ地区は地中海に面した細長い地域で、広さは東京23区の6割ほど、そこに222万人が暮らしています。人口密度は東京都全体とほぼ同じくらいです。戦争の過程でエジプトの支配下になったり、イスラエルに占領されたりしましたが、2007年以降はハマスがガザ地区を実効支配するようになりました。そして、イスラエルはガザ地区を封鎖するようになりました、そこで暮らす人々はガザ地区を自由に出入りすることができなくなりました。サヘルさんは双子の高校生の2人を含む4人の子供さんら家族と、封鎖された地区の中で生活していました。

日本の高校生とガザの高校生とのオンラインの交流は、その当時のガザの様子について、日本の高校生の質問に対して、ガザの高校生が答える対話でスタートしました。ガザの高校生は、イスラエルからのミサイルが街に飛んできたことがとても怖かった、自分たちが知っている場所が爆撃によって壊されてしまってとても悲しいといった話をしました。この交流の1カ月前に、イスラエルのロケット弾攻撃がガザ地区に行われたというニュースが報道されており、パレスチナ問題に関心の高い日本の生徒は、ガザ地区が今どういう状況で、人々はどんな暮らしをしているのかを、具体的に聞きたい気持ちが強くありました。ガザの高校生が、ディスプレイの画面越しに、ガザ地区の爆撃された場所の写真を見せてくれたので、日本にいる私たちは戦争の怖さ、ミサイル攻撃の恐ろしさを実感することができました。

やがて、話題はそれぞれの生徒たちの最近の関心事や趣味のこと、将来の夢に移り、ガザの男子高校生が、自分は将来映像制作者になりたいと思っているという話を始めました。そして、自分のインスタグラムに載せた写真、ギターをもって歌っている様子をディ

スプレイ越しに見せたところから、日本とガザの同じ世代の若者同士の動画や音楽の話題で、交流はとても盛り上りました。生徒たちはインスタグラムやフェイスブックなどのSNSのアカウントを画面越しに交換し、その場で相手のSNSに接続して、アップされている動画や音楽で、楽しい時間を共有しました。私は、その光景を見ながら、イスラエルに封鎖されているガザ地区であっても、交流をこんなに楽しむことができる、現在のインターネットの技術の発達はすばらしいと、とても感心したこと覚えています。

その交流から2年経った2023年10月に、ガザ地区を実効支配しているハマスは、イスラエルへの大規模な越境攻撃と人質拉致を行い、その報復としてイスラエルはガザ地区への軍事作戦を開始しました。イスラエル軍によるガザ地区への激しい攻撃、封鎖、そして戦闘の長期化により、現在のガザ地区は壊滅的状況にあり、2025年12月中旬で死者数は6万7千人、負傷者数は約17万人に達していると言われています。すなわちガザの人口の10人に1人が亡くなるか、けがをしたという状況です。一方のイスラエルも約2千人が死亡し、負傷者数は約3万人となっています。ガザ地区の住民の多くが避難を強いられ、食料、水、医薬品、燃料が極度に不足し、人道支援や救援物資が届かない状況が軍事作戦開始以降続いていると言われています。また、2025年10月10日に停戦が発効しましたが、その後も戦闘は完全に止まったわけではなく、継続して行われているという報道もされています。

ガザ地区への人道支援は、主に国連の機関であるUNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)を中心に行われています。AIで調べてみると、支援をしている国連機関はUNRWA以外でもWFP(世界食糧計画)、UNICEF(国連児童基金)、WHO(世界保健機関)といった複数の機関があり、NGOでは国境なき医師団(MSF)、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)、オックスファム(Oxfam)、CARE、セーブ・ザ・チルドレン(Save the Children)などの組織が支援を行っているとあります。日本の支援団体として、ピースウインズ・ジャパン(PW)、パレスチナ子どものキャンペーン(CCP)、日本赤十字社、JICA(国際協力機構)なども支援をしているということです。

サヘルさんがJICAの職員ということは最初に書きましたが、JICAがどんな組織かというと、外務省所管の「独立行政法人」として、発展途上国に対しての政府開発援助(ODA)を推進する団体で、「Japan International Cooperation Agency」の頭文字をとってJICAと呼ばれます。パレスチナにはJICAの現地事務所がヨルダン川西岸のラマッラという場所にあり、日本人職員と現地職員が一緒に働いています。サヘルさんもそうしたJICAの現地職員だろうと推測しています。

繰り返しになりますが、2023年10月以降のガザ地区に対してのイスラエルの攻撃によって、ガザ地区は食料、水、医薬品、燃料が極度に不足する状況となりました。空爆によって家を失った人々が避難民となり、街並みは破壊され、日本の支援が集中的に行われた地域も攻撃対象となりました。私たちはさまざまな報道によってガザ地区の悲惨な状況を知ることができます、人道支援のためにガザにいる人々や、報道スタッフなどといった

人からも大勢の犠牲者が出るような状況となっています。

そんな中で、JICA は他の支援団体と協力して支援物資をガザ地区に持ち込み、人々に配布する活動を行っていました。サヘルさんが支援物資を配布する様子の写真が、現地からさまざまな人を経由して私に届きました。

1枚目の写真は、2024年5月2日の様子です。3,780食分の食料をラファ経由でガザ地区に持ち込み、それをサヘルさんたちが避難民に配布しました。ラファとはエジプトとガザ地区の検問所があるところです。ここから少しづつ救援物資がガザ地区に入っていました。支援の食料の中身は、チキン、豆類、フムス（ひよこ豆のペースト）、ツナ、イワシの缶詰、脂質としてオリーブオイル、高エネルギー biscuit、ハルヴァ（練り菓子）、イチジク、アプリコット、レーズンなどのドライフルーツといった食料だということでした。

2枚目の写真は、同じ年の7月20日から21日の活動の様子です。JICA がガザ地区の避難民家族を支援するための救援プロジェクトを実施し、ガザ中央部およびガザ南部のハーンユーニスに避難している200世帯に対し、食料パッケージを配布しています。これらのパッケージには、オリーブオイル、砂糖、米、ナツメヤシ（デーツ）、ジャムなど食料品、その他の生活必需品が含まれていて、それをサヘルさんが配布作業をしています。

3枚目の写真は、さらに同じ年の9月5日にガザ南部にあるハーンユーニスのUNRWA日本人保健クリニックで開催されたポリオ予防接種キャンペーンに、サヘルさんが参加しています。ガザ地区の10歳未満の子どもにワクチンを接種し、ポリオの感染から子供たちを守ることを目的とした取り組みで、下水インフラが破壊されたことから、感染症から子供を守るために行われていて、サヘルさんが参加している様子を写真で見ることができます。

攻撃によって壊滅的被害を受け、支援物資も届かない中で人道支援の仕事を続けることが、いかに困難であるか、日本で暮らす私たちの想像を絶する状況があるかと思います。先日のNHK特集では、ガザで報道を続けるカメラマンのドキュメントが、破壊された市街地の様子とともに放映されていました。命の危険と隣り合わせであっても、人間としての尊厳を守るために行動をしている人たちがいることが、戦争と紛争が続く世界の中で生きる私たちにとって救いであるようにも思います。

2024年のサヘルさんの活動の様子は、こうした写真から知ることができましたが、2025年以降の活動が分からず、サヘルさんが無事でいるかどうか、私はとても心配していました。サヘルさんの近況を教えて欲しいと、高校生交流を実施した英語の先生にお願いしていたところ、JICAと連絡をとってくださり、サヘルさんが無事でいること、JICAの活動を続けていることが分かりました。そして、日本の生徒たちにメッセージをくださったので、皆さんにお伝えいたします。

サヘルさんのメッセージは次の通りです。

**I am still enjoying the storm.**

**I am never ever giving up.**

**I am still in Gaza during the war and I refused to evacuate to help GAZA people by JICA and Japanese assistance.**

**I was born in GAZA and I will die in GAZA.**

最初の行の「I am still enjoying the storm.」は少し説明が必要です。今回、サヘルさんの近況を、英語の先生を経由してお伝えくださった三井祐子さんとおっしゃる JICA の方が、パレスチナ事務所所長の時に、サヘルさんに「嵐の時こそ、それを楽しめ」とおっしゃったという言葉を踏まえています。その後サヘルさんは何度も困難な局面でこの言葉を自分に言い聞かせて踏ん張ってきたそうです。

三井さんからはサヘルさんの近況もお伝えいただきました。サヘルさんのお子さんは二人ともその後大学生になりました。お嬢さんは、イタリア留学が決まっていましたが、今回の戦争でガザから出られなくなっていました。今年になってようやくイタリアに留学することができました。サヘルさんはガザ地区から避難する選択もあったと聞いていますが、自分が逃げたらガザに支援がいかない、復興できないという理由でガザ地区に残る道を選びました。ガザ地区内にあった JICA パレスチナ事務所ガザ支所も、サヘルさんの自宅もイスラエルの空爆で破壊され、現在はサヘルさんは家族で国内避難民となって、テント暮らしをしているということでした。

サヘルさんは、決して諦めない、ガザの人々を助けるため、JICA と日本の援助によりガザにとどまり続ける、ガザに生まれ、死ぬまでガザにいるというメッセージを日本の生徒に伝えてきています。

サヘルさんがガザにとどまり続け、戦争により不幸な境遇に陥っている人々を助け続けている姿に、私は人間の崇高な精神の在り方、人の尊厳を守り続ける精神の気高さを感じます。サヘルさんのメッセージから生徒の皆さんには、その精神性を感じ取って欲しいです。同じことはできないかもしれません、人として高い精神性、人の尊厳を守り続ける気高さを皆さんももつような人になって欲しいと願っています。また、それと同時に、世界中で起きている紛争や戦争を、止めることができない複雑に絡み合った利害関係、政治権力闘争、歴史的な経緯から生まれる悪感情といった根深い人間の愚かしさをどうやって超えていくことができるかを、私たちは考え、実行していかなければなりません。

国同士が争うこと、戦争や紛争により多くの人が不幸になります。2025 年は残念ながらそうした戦争や紛争が解決しないまま過ぎていきました。私たち人類が取り組まなければならぬのは、領土の奪い合いや政治勢力の拡大ではない、一人一人が幸せに暮らすことができる世界をつくることです。サヘルさんのような命がけの人道支援活動ができない私たちができることは何だろう、そんなことを苦悩しながら 2025 年は終わっていきました。2026 年では今行われている戦争、紛争が止むことを心から願い、引き続きサヘルさん

の無事を祈りながら校長メッセージを終わります。

リンク

2025年12月校長メッセージ 「唐獅子さん」

2025年11月校長メッセージ 「カーボンリサイクル」

2025年10月校長メッセージ 「辞書を食べる」

2025年9月校長メッセージ 「恐竜の死体が化石化するプロセス」

2025年8月校長メッセージ 「グラフを発明したのは誰か」

2025年7月校長メッセージ 「早朝の両国にいるオナガは一体どこから来るのか」

2025年6月校長メッセージ 「現代社会における霸道と王道」

2025年5月校長メッセージ 「おいしいラッシーのつくり方」

2025年4月校長メッセージ 「『NEXUS 情報の人類史』を読んで考えたこと」